続 お薬よもやま話

＜ 21 ＞

くすり九層倍

その昔、山野草や樹皮などを陰干した後、それらを切り刻んで混ぜ袋に詰めて、あるいは粉に水を加えて練って貝殻などに入れ、または丸薬にしたりして、秘伝薬として売っていた時代がありました。

原材料はほぼタダ、家内生産なので人件費もゼロに近い生産コスト。それが高い値段で売れたのです。安く作れて高く売れる付加価値の高い商品の代表だという意味で「くすり九層倍」と多少の揶揄（やゆ）や妬みを込めて言われていました。多分に「あんたら、楽に儲かってエエな」という皮肉が込められていたのでしょう。

ところが今や薬の現状は「くすり九層倍」とはほど遠くなりました。すなわち、近年の医薬品においては、国際的な厳しい製造管理および品質管理に関する基準を守る必要があり、そのための設備、人員、検査データの管理に多大な費用がかかるのです。

新薬に至っては、まず特許申請に多大な費用を掛け、さらに医薬品の臨床試験の実施基準を手間暇掛けてクリアするのに、一説では一つの新薬に数百億円の開発費と10年近い期間を要するそうです。

従って、日米欧のような総合的に社会的環境が整った先進国でしか新薬は生まれないし、新薬開発に当たっては綿密な事前調査が重要だと言われています。

薬の市販後調査、薬の情報提供、副作用情報の収集・伝達についての基準も定められています。薬の営業についても医師に対する派手な接待や物品提供などは出来なくなり、製薬会社間の競争も最近はなかなか大変なようです。

という訳で、「くすり九層倍」という古き良き時代の言葉はお蔵入りとなってしまいました。